

皆さん、こんにちは

前回は 手前味噌な話であり、皆さんの興味のある内容に今回はしたいと思います。

今回は 最近脚光を浴びている免疫療法についてです。

オプジーボというのは商品名ですが皆さん、マスコミの報道等できいたことがあるのではないかと思います。オプジーボの中身の成分は『ニボルマブ』 といってこちらは一般名といいます。

一般名で説明した方が、公平な立場で話ができますので、今回はこちらの名前で話を進めます。

ニボルマブが脚光を浴びた理由としては2つあります。

- ① 今までと作用の仕方が異なり、今までの治療が効かなかった人にも効く可能性があり、かつ、その場合、比較的長期間効果が続くこと
- ② もうひとつは、その値段！ とても高くて国がつぶれるなどという言い方がされ、その後きわめて異例に短期間に 50%off(半額)に薬価が下がったということ
(体重 50kg の肺がんの人で、薬代が 1 ヶ月 200 万円越えていたところが、100 万円に)

だろうと思っています。

値段のことを言い過ぎてはいけないですし、一般の方は値段のことより、薬の効果やどんな場合に使えるのかの方が、気になるでしょうから、今回はそれについて書いてみます。

ニボルマブは 2014 年 7 月に まず 悪性黒色腫（ほくろみたいな『がん』）で使えるようになりました。その後、2015 年 12 月に、患者さんの多い 非小細胞肺がん にもつかえるようになり、いっきに使用頻度が増えてきました。その後、2016 年 8 月には、腎細胞がん、ついて 2016 年 12 月には ホジキンリンパ腫にも使えるようになりました。



他の臓器から発生したがんについても 保険適応申請がなされています。

例えば、頭頸部がん については 2016年7月に、胃がん については2016年12月に申請がされており、2017年中にはこの2つのがんについても使えるようになるのではないかと予想されています。また、それ以外の臓器のがんについても治療開発がすすめられています。

ニボルマブは画期的である反面いくつか理解しておく点があり、それについて述べます。

- ① どこにがんができたかによりますが、おおむね、効く方の割合は20%程度ということ。
- ② 現時点で、誰がその20%に当たるかわからないこと。
- ③ これまでとタイプの違う薬なので、抗がん薬の副作用のイメージとは異なる副作用がでるので、治療する施設（病院）と処方する医師はある程度限定されるべきものであること。

少し、解説を加えます。効く方は、これまでの抗がん治療と異なり長い期間効果が持続するという一方で、効く人にとっては大変良い治療ということになりますが、効かないの方が確率的に多く、値下がりしたとはいえ、高価で、かつ、多彩な副作用がでる可能性があることから、不要な投与をさけるために、投与する前にこの薬剤が効くのか効かないかを予測できる方が望ましいわけです。現時点ではそれがわからないので、保険適応のあるがんの方であれば、投与できるわけです。また不思議なことに、効く方でもいったんがんが大きくなることもあり、いつの時点まで使って効果を判定すべきかは議論の残るところとなっています。

副作用についても述べておきます。抗がん剤の副作用というと、吐き気や、脱毛、血液の数が減ることによる発熱等を思い浮かべる方が多いように思います。『ニボルマブ』に代表される免疫療法では、こういったことは比較的少ないですが、急に糖尿病になってインスリン治療が手放せなくなったり、甲状腺の機能が狂ってしまうなど今まであまり聞いたことがないような副作用が出る可能性があるため、これまで以上に、様々な診療科との連携が大切です。従って、いろいろな症状に対応できるようながん治療の体制の整った病院で、こうした治療による変調に気づきやすい経験を持った医師のところで治療を受ける必要があります。

当院では、専門医が各診療科と連携をとってニボルマブ治療を行っており、安心して治療を受けていただけます。

今回はここまでで ではまた。

